

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第十六号



仙台駅近くの地下道

「重力ピエロ」
(新潮文庫 2006年)

「重力ピエロ」伊坂幸太郎より
春の動きは素早かつた。一瞬も休むことなく作業を続いている。手に持ったスプレー缶を軽快に振る。からからとリズムを取るような音が鳴る。噴射口を壁に向かたかと思うと、腕を大胆に動かす。色が壁にじわっと定着する。缶を地面に置くと、ほとんど下を見ずに別のスプレーをつかみ、振る。からからと鳴らし、また、壁に噴射する。立つ位置を変える。腰をかがめ、下部に色をつける。手首が柔らかく動いている。

(伊坂幸太郎「重力ピエロ」より)

地下道の階段を、恐る恐る降りていく。春はそこにいた。……壁を睨む横顔には、画家の集中力が漲っていた。……私は反対側の壁に背中をつけて、春の描いていた絵を見た。はつとして、息を呑む。

スプレー

文学のある風景

円が描かれていた。球体と言つたほうが近いだろか。光沢やグラデーションが不思議な立体感を作り、その球体がいくつも並んでいる。大きさは様々で、微妙に重なり合い、全体がさらに巨大な円形を作っている。スプレーでこれほど綺麗な円を描けること自体が、私は驚いた。光沢のあるその球体は明らかに無機物をイメージしているはずだが、その集合体は、どこか生き物にも見える。

スプレー

文学のある風景

「やさしい」という言葉が、いまいろんなところで価値判断の決定材料として用いられている。地球にやさしい、環境にやさしい、お肌にやさしいなどなどだ。これらはみな「やさしい」とひらかな書き「優しい」とは書かない。「地球に優しい」「環境に優しい」と書くのを見たことがない。どうしてだろう。

きっと、それは「優しい」と「やさしい」では「やさしい」の方がヤサシク見えるからである。どうしてそう感じられるか。

「やさしい」を手元の漢和辞典の訓索引で引くと「優」と「易」とふたつの文字がある。方やテンダーであり、方やイージーである。まるきり概念が違う。そのままきり違う概念が和語にあつてはともに「やさしい」という形容詞になる。ここにややこしい錯覚が生ずる原因がある。共に「やさしい」であるから、イージーであることがテンダーであるかのように、また、テンダーであることがイージーであるかのよう

小学校でまずひらかなを習う。ひ

んなどだ。環境にやさしい、お肌にやさしい、などなどだ。これらはみな「やさしい」とひらかな書き「優しい」とは書かない。「地球に優しい」「環境に優しい」と書くのを見たことがない。

どうしてだろう。

きっと、それは「優しい」と「やさしい」では「やさしい」の方がヤサシク、やさしいゆえに優しくて「優しい」とは書かない。「地球に優しい」「環境に優しい」と書くのを見たことがない。

「やさしい」

気になる日本語

5

らかなかが読み書きできるようになって漢字を習う。だから漢字よりひらかながイージーで、つまり「優しい」より

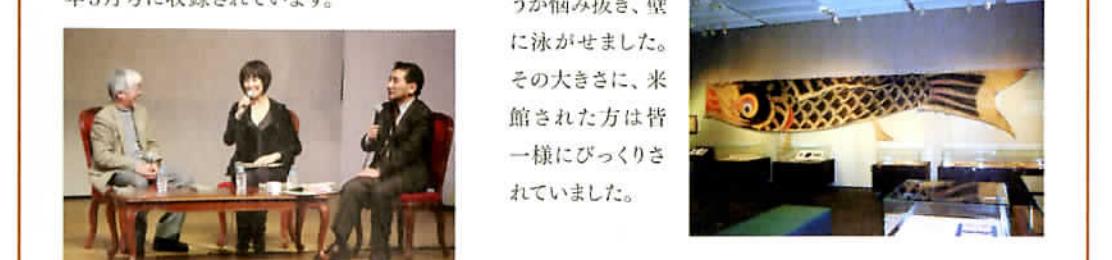
故意か無意識にか曖昧にした「やさしい」なる日本語は、どうも信頼がおで、読んでというより見て、瞬時に理解、了解しているのである。「せんないぶんがくかん」ならそうはないかない。そんなわけで「優」と「易」の区別を

解して、「やさしい」という言いに睡つすることにしている。
やさしいことは、易しいことではない。
けない。「○○にやさしい」という言い回しに出会うとき、いつもわたしは眉間にしわを寄せてしまう。なぜかといふと、それは漢字よりもひらかながイージーで、どっちがハードかといふことはない、と思う方が正しい。それは漢字を一切使わないひらかなだけの新聞でも想像してみればいい。読めたものではない。漢字よりひらかながやさしいなら、その新聞の方がやさしく読めるはずだが、実際はまったく逆である。ひらかなだけの文章はやさしいどころか、むしろはるかにムズカシイものになる。

漢字とひらかなはほどよく混じり合っているのが一番読みやすい。ひらかなは一字一字順番に全部読んでいかないと意味がわからない。この作業が大変である。ひらかなだけの文章はやさしいへん疲れるのである。漢字(熟語)はそうではない。全体を丸ごと見て、一瞬で概念を理解できる。だから疲れない。「仙台文学館」を「仙」「台」「文」は「学」「館」と二文字ずつ読む人はいないはずで、五文字を一日で、あるいはせいぜい「仙台」「文学館」の二目で読ん

○12月19日、ライブ文学館「名曲喫茶の時代~小池真理子「無伴奏」」を開催しました。小池さんの代表作のタイトルにもなった「無伴奏」は、仙台に実在した伝説の喫茶店です。高校時代そこで詩を書いていたという小池さんと、元店主の木村雅雄さんとは実に40年ぶりの再会。やはりお店の常連だったという当館館長・小池光の3人で、チエンバロとチェロの音色を味わいながら、当時の想い出を振り返りました。

*トークライブの内容は『小説新潮』2009年3月号に収録されています。



○12月23日、瀬名秀明さんが来館し、新しい常設展示をご覧になりました。ご自身のコーナーでは少し照れくさそうでしたが、展示資料のドラえもんとの久々の再会に、笑顔を見せっていました。



仙台文学館ニュース 第十六号

仙台文学館
Sendai Literature Museum

〒981-0902 仙台市青葉区北根2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
<http://www.lit.city.sendai.jp/>

【表紙写真】佐々木隆二
【印刷】(株)ユーメディア

言葉と本——この人が語った、あの人・あの作品から

仙台文学館が開館したのは一九九九年三月二十八日のこと。以来十年間、文学館のさまざまなイベントでは、第一線で活躍する方々をゲストにお迎えしてきました。今回はこれまでの講演のなかから、「言葉のプロフェッショナル」による、楽しく刺激的なお話を厳選して紹介します。

とよたかずひこ（絵本作家）が語る

「絵本づくりと、小津安二郎」

どうしても私たち絵描きというのはサービス精神があって、場面をコマ割りで見せたがる傾向が往々にしてあります。ところが、子どもというのはわりと想像力が豊かで、あんまり言葉の説明をしなくても、時間の経過みたいなものは予想してくれるんですね。ひとつひとつうだよと説明するのではなくて、同じ風景での動きを想像させる作業——たとえば、小津安二郎映画のように定点でカメラの長回しをして、余韻みたいなものを残していく——そんな絵本づくりをしています。

（講演「こちらのたべものづくり」より 二〇〇〇年七月三十日）

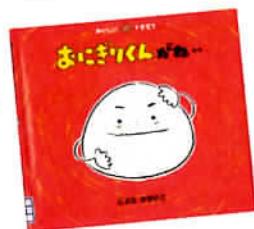


井上和男編『小津安二郎全集』
(2003年 新書館) 小津安二郎
監督作品の脚本を収録。

小津安二郎（おづやすじろう）
1903～1963 映画監督。代表作に「晩春」「麥秋」「東京物語」など。現在でもその作品は国際的に高く評価されている。



とよたかずひこ 1947年仙台市生まれ。絵本作家。作品に『ぼくはやっぱりりんなりなんだ』『でんしゃにのって』『バルボンさん』シリーズ、「ももんちゃん」シリーズなど。



高橋源一郎（作家）が語る

「三浦雅士『青春の終焉』」

三浦雅士さんの青春論が非常におもしろいと思ったのは、ぼくも同じことを考えていたからです。極端なことを言いますと、三浦さんは「文学がためになったのは、青春がなくなつたからだ」とすごい断定をしたんですね。

明治二十年くらいに日本近代文學ができたとき、そのころ文學というのは簡単にいうと「青春」を書くことでした。エリートたちが大学に入つて愛や政治や文學に悩む。全部それです。この「青春」がいちばん大事という風潮はほぼ一九七〇年くらいまで続いていた。それが八十年代になるとピタリとなくなる。これは非常に劇的なことです。実はこれが日本文學の「盛」から「衰」へのターニングポイントであり、キーワードですね。

（講演「日本文学盛衰史」より 二〇〇二年三月二日）

高橋源一郎 講演会

「日本文学盛衰史」

近作「日本文学盛衰史」を中心に、文学の未来を語ります。

日時 3月2日(土)
午後2時～

会場 仙台文学館講習室

定員 200名



高橋源一郎（たかはし・げんいちろう）
1951年広島県生まれ。作家。著作に「官能小説家」「ミヤザワケンジ・グレーテスト・ヒット」「大人にはわからない日本文学史」など。

三浦雅士「青春の終焉」(2001年 講談社)「仙台文学館ニュース」第3号に、三浦さんの講演「昭和初期の詩と青春」が抄録されています。

三浦雅士（みうら・まさし）
1946年青森県生まれ。評論家。著作に「メンランコリーの水脈」「身体の零度」「出生の秘密」など。

清水真砂子（しみず・まさこ）1941年現・北朝鮮生まれ。児童文学者・翻訳家。「ゲド戦記」全6巻の翻訳のほか、著作に「子どもの本の現在」「幸福に驚く力」など。



（講演「ゲド戦記」の読み方）より 二〇〇六年九月九日

吉野せい（よしの・せい）
1899～1977 作家。詩人の夫、三野混沌とともに開拓生活に從事する。70年に夫が没した後、本格的に作品を執筆、発表した。

『ゲド戦記』に登場するテナーという女性は、いつたんは男の論理的、知的な世界に入っていくんだけれど、どうもそれだけでは何か欠けているんじゃないかというのでもう一度女のもらしを全部引き受け、もらしを通して言葉を考えたと

（講演「ゲド戦記」の読み方）より 二〇〇六年九月九日

栗津則雄（評論家）が語る

「草野心平とじう詩人」



詩人の生活と創作の渦中に入りこむよう你感覚を味わえます。

【草野心平日記】全7巻
(2005～2006年 思潮社)

写真提供 いわき市立草野心平記念文学館

刊行が完結した「栗津則雄著作集」全7巻(2006～2009年 思潮社)

草野心平（くさの・しんへい）
1903～1988 詩人。詩集に「第百階級」「定本蛙」など。長年、仙台の詩賞「晩翠賞」の選考委員を務めた。

草野心平といふ人は本当におもしろい人でした。草野心平の晩年ですけれども、あるとき、朝の八時頃に電話がかかってきて、「栗津君、君ねえ、ゴーギャンの赤ね、あれ、君、悲しみの色だね」。いきなりですよ。こちらはやつと自分が覚めたばかりなんだけれど。それとも、僕はその前にゴーギャンの画集の解説を書いていた。それを草野心平にあげたんですよ。それを前の晩に読んで、「わかった! ゴーギャンの赤は悲しみの色だ!」って発見して、「これを栗津に知らせる」と。夜中だから周りが制止するんだけど、一晩中寝ないで待つて電話をかけてきた。——こういう人はいいね。こういう人に会つちゃったということは僕にとって決定的で、生きている甲斐があったという気がしますよ。

（講演「草野心平の人と作品」より 二〇〇八年十月十九日）



清水真砂子（しみず・まさこ）1941年現・北朝鮮生まれ。児童文学者・翻訳家。「ゲド戦記」全6巻の翻訳のほか、著作に「子どもの本の現在」「幸福に驚く力」など。



吉野せい（よしの・せい）
1899～1977 作家。詩人の夫、三野混沌とともに開拓生活に從事する。70年に夫が没した後、本格的に作品を執筆、発表した。

（講演「ゲド戦記」の読み方）より 二〇〇六年九月九日



栗津則雄（あわづ・のりお）1927年愛知県生まれ。評論家・仏文学者。いわき市立草野心平記念文学館館長。著作に「正岡子規」「栗津則雄著作集」全7巻ほか。

ブックレット販売中!

ここでご紹介した高橋源一郎さんのお話のほか、11本の講演・イベントが「仙台文学館ブックレット」シリーズとして刊行されています。お求めは当館受付で!

吉里吉里国

お出んせ

「井上ひさし展」
ガイド

開館10周年を記念する「井上ひさし展～吉里吉里国再発見」が、3月28日(土)にオーブンしました。この展示は、初代館長を務めた作家・劇作家、井上ひさしの代表作『吉里吉里人』を軸に、「愉快で深い」井上ワールドの再発見を試みようというもの。

今回、展示室はずばり「吉里吉里国」。お客様には「旅券」(観覧券)を持って「入国」し、国内を周遊していただきます。その見どころ、ちょっとだけご案内します。

吉里吉里国立劇場をイメージした小さなステージがお目見え。舞台はまさに井上ひさしの言葉が生むを得る現場。会期中にここで披露される井上作品をご堪能あれ。



「井上ひさし展」展示室



井上ひさし(撮影 佐々木隆二)

吉里吉里国立駅の看板がお出迎え。「旅券」を提示して「入国」したら、まずは吉里吉里国の国旗や国歌に(恥ずかしがらずに)親しみましょう。言語を吉里吉里語に切り換えられるとなお可。これであなたも吉里吉里人の仲間入り!

6月上旬のある日の早朝、岩手県にある小さな町が突然日本からの分離独立を宣言し、「吉里吉里国」を打ち立てる。この人口4187人の小国には、100%の農業自給率、最先端の医療技術、4トンの埋蔵金、金本位制にして無税の経済政策など、武力に頼らぬ強力な武器(切り札)がある。その吉里吉里国を目指し、世界の大企業が支店を進出し、通貨「イエニ」の価値は急上升する。そんななか、吉里吉里への「移民第1号」となる作家古橋健二は、独立を認めようとしない日本政府や国外からの侵入者との珍妙な攻防に巻き込まれていく。

吉里吉里国が誇る最先端医療の最前線。世界トップレベルの医師が最高の技術で治療にあたっており、長寿を望む大金持ちの憧れの的です。

吉里吉里国が誇る最先端医療の最前線。世界トップレベルの医師が最高の技術で治療にあたっており、長寿を望む大金持ちの憧れの的です。

吉里吉里国が誇る最先端医療の最前線。世界トップレベルの医師が最高の技術で治療にあたっており、長寿を望む大金持ちの憧れの的です。

展示室ではこのよう立体的に展開されています。楽しみ方、感じ方は自由!
……みやさん、「吉里吉里国、びんせあ出んせ~」。

開館10周年記念特別展「井上ひさし展～吉里吉里国再発見」

[会期] 3月28日(土)～7月5日(日)(月曜、休日の翌日、第4木曜日は休館)
[観覧料] 一般700円、高校生400円、小・中学生200円



「吉里吉里人」1981年8月新潮社刊
著者 安野光雅

予告

こまつ座「兄おとうと」(井上ひさし作)
上演決定!

9月26日(土)、27日(日)
仙台市青年文化センターシアターホール

兄は「民本主義」を唱える吉野作造。弟は有能な高級官僚。宮城県古川出身の二人の兄弟と「国家」をめぐる物語。ゆかりの地・宮城での上演は必見です!



「兄おとうと」
2003年10月 新潮社刊

仙台文学館ゼミナール2009のご案内

ご好評をいただいている「仙台文学館ゼミナール」。2009年度も多彩なテーマ、講師陣による講座を予定しています(内容は変更になる場合があります。詳しくは4月中旬頃から配布予定のチラシ、ホームページ、仙台市政だより等をご覧ください)。

近代文学を読み解くコース

「宮沢賢治～銀河鉄道の夜」を読む 全3回
講師：佐藤通雅(歌人評論家)

「『女三人のシベリア鉄道』を読む」全4回
講師：森まゆみ(作家)

現代文学を探求するコース

「佐伯一美と読む現代の文学」全3回
講師：佐伯一美(作家)

「池上冬樹の書評講座」全5回
講師：池上冬樹(評論家)

日本の古典に親しむコース

「日本の神話を読む」全5回
講師：犬飼公之(宮城学院女子大学教授)

「『平家物語』を読む」全5回
講師：佐倉由泰(東北大学准教授)

表現をみがくコース

「俳句講座」全5回
講師：高野ムツオ(「小熊座」主宰)

「朗読ワークショップ」全5回
講師：渡辺祥子(フリーアナウンサー)

「川柳講座」全5回
講師：雪石隆子(「川柳宮城野」主幹)

総合指導：雪石隆子(「川柳宮城野」主幹)



開館10周年記念特別展「井上ひさし展～吉里吉里国再発見」

[会期] 3月28日(土)～7月5日(日)(月曜、休日の翌日、第4木曜日は休館)
[観覧料] 一般700円、高校生400円、小・中学生200円

